
とある吹奏楽部にて。

真白

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある吹奏楽部にて。

【Nコード】

N8265N

【作者名】

真白

【あらすじ】

平凡な男子高校生と、とある吹奏楽部員のお話。

吹奏楽部。

大半の人が、大人しくて運動部よりも少し影の薄い、でも時には運動部なみに走りこんだりもする、縁の下の力持ち的な、真面目なイメージを持つだろう。

少なくとも僕はそうだった。

うちの学校の吹奏楽部は、何かと美形が多い。

学校中の可愛い子達が集まっているんじゃないかってくらい、美人だらけなのだ。

そんなわけで、当然ながら我が校吹奏楽部は、男子から絶大な人気があり、部活の時間は音楽室を覗きに行く輩も少なくはないわけだ。

でも、わざわざ覗きに行くのではなくて、もういつそ入部してしまえば、小さな窓から眺めるよりも間近で部員たちを拝めるではないか、と思う人がいるかもしれない。

……ここで男子達も頭をかかえる大きな問題が1つ。

この吹奏楽部、実は男子の入部を固くお断りする、いわゆる男子禁制の部なのだった。

ふわあ、と大きなあくびを1つつく。

僕こと竜胆嵐^{りんとあらし}は今、非常に退屈しているのである。

珍しく部活も早く終わり、やることがない。

一緒に帰っている友達を待っているにも、早くてあと2時間後で、時間があまりすぎている。

じっとしているのもつまらないし、何か面白い退屈しのぎはないかと、意味もなく廊下をぶらついていてるところであった。

うちの高校は、部活の数が豊富である。

特に文化部は伝統のあるものばかりで、けっこう見ていて面白い。中には和太鼓部、なんてのもあって、お祭りの季節でもないのに、ドンドコドンドコ年中無休でやっていたりもする。

そんな個性的な部活を遠目に眺め、音楽室の前を通り過ぎようとした時。

「うわっ!？」

どたん、と盛大な音をたててコケた。

なんで!？

足元にひらりと落ちる、なにやら白い紙。

僕はどうやらそれにつまずいたらしい。

五線譜が書いてあるのを見ると、これは楽譜だろうか？

僕には到底理解できない、音符だの休符だの、意味不明な記号の羅列のオンパレード。

題名は、ラブソディー・イン・ブルー。

パートはテナーサックス。

ああ、吹奏楽部か。

テナーサックスなんて、特に目立った楽器じゃないし、サックスといえばアルトサックスの方がメジャーなわけで、僕はテナーサックスを吹いている生徒なんて知らない。

フルートやトランペットなら、文化祭でソロをやったりと、わりと活躍していて、顔くらいは分かるのだが。

でも落し物を拾った以上、そのままにしておく訳にもいかないし、持ち主に届けてやる義務がある。

ま、いいか。

吹部の人可愛いし。

たしか、吹奏楽部は合奏の時以外、使っていない教室を借りてパート練習を行っていたはず。

だいぶ前に、サックスパートは1年5組だと、覗き常習犯の変態友達が言っていた気もするし。

とりあえず、もと来た廊下を引き返し、1年5組を目指すことに

しよつ。

「すいませーん」

たたたつたらつたたー、と冒頭部分を吹いていたサクスの音がピタ、と止んだ。

男子禁制の部ということもあり、女の子だけにいるところ、いきなりドアを開けるのはどうかと思ったので、ドアは閉まったまま声だけかけてみた。

「楽譜落ちてたんですけどー、テナーサクスってここですよね？」

「はあ！？ 何なのあんた、さっさと渡せっつの！」

ガララララララ、とんでもなく大きな音をたてて、そしてまた、とんでもなくでかい声をあげて出てきた小さな女の子。びっくりした。

黒髪ぱつっん、耳の下あたりで二つ結びと、大人しそうな子なのに、どこからそんな馬鹿でかい声が出てくるんだ。

「のろいんだってば！ はいはい、ありがとーごさいますし」

ひったくろうとした彼女の手が、言葉と共に固まった。

そして、僕の顔を凝視しながら、間の抜けたような声で。

「あれ……？ なんで、嵐……？」

初対面で名前呼び、とはこっちの方がびっくりだ。
ていうか、こいつ誰？

とくに目立つこともない、僕の名前を知っている人なんて限られて
いるし、僕に親しい女の子なんていただろうか。

そこで僕は初めて、ぱつっん女の顔を正面から見つめた。

僕を見つめ返してくる目は、黒目がちで大きくて、丸顔で、美人
というよりは、愛嬌のある可愛い顔をしている。

まったくもって覚えがない。

僕が首をかしげていると、ぱつっん女はちょっと機嫌が悪くなっ
たようだった。

「覚えてないんだー、4年くらい前だしねー」

てことは、中1の頃……？

僕の中学校の思い出といえば、3年間ずっと担任が同じ人だったこと、仲の良かった友達が引越してしまったこと、好きな人にふられたこと……

思い出したくないことばかりだ。

「ああごめん、用事があるからまたな」

僕はそういつてはぐらかし、今日のことは忘れようと思った。

吹奏楽部は、大人しくて可愛い子だけがいるわけじゃなかった、ということ以外。

あのぱつつん女のことなんて、すっかり綺麗に忘れ去ったある日のことだった。

日直だから、という理由で先生にパシられた僕は、2年4組の教室へ向かっていた。

「ごめんね、竜胆くん！ 先生これから会議だから、このプリント4組もつてといて！」

とかなんとか言って、僕にとんでもない量のプリントの束を渡してきやがった。

いいんだけどさ、どうせ暇だし。

まだ、教室にはちらほら人が残っている。

窓の外を眺めるカップルだったり、友達としゃべっている女子達だったり。

人がいる中で他教室にプリントを持って入るのは、少し気が引けるけど、頼まれた以上はしかたない。

さっさと済ませて、出てくるとしよう。

カラカラ、と小さな音を立てて前のドアを開ける。

「……っ」

僕は信じがたいものを見た。

夕日で真っ赤に染まった教室で1人、窓の外を眺める女の子。
入ってくる風で髪がこぼれ、さらさらと舞うその姿は、僕は見覚え
があった。

中学生にあがって間もない頃、僕に恋人ができた。
死ぬ思いで想いを伝え、やっと叶ったはずなのに。

彼女は、2年生にあがる少し前に、親の転勤で引越してしまった
のだ。

寂しくて、悲しくて、忘れ去ることしか悲しみを癒せなかった僕
は、彼女と過ごした1年間、無かった事にして過ごしてきた。

5年前、中学1年生だった僕は、放課後の教室で、真っ赤に染ま
った夕日を背中に、彼女に告白した。

今の状況は、あまりにもその時にそっくりで、まるで時間が止ま
ったかのように、僕はその後ろ姿から目が離せなかった。

「杏里……？」
思わずつぶやいた言葉は、もうもとは戻らない。

ゆっくりと、その女の子は振り向いた。

「嵐」

下を向いたまま、僕の名前を呼ぶ。

そして。

「やっと、思い出した？」

「え？」

がばつと顔をあげたその子は、

「ぱつつん女!？」

大きな目、丸い顔、桃色の小さな唇。

まぎれもなく、あのぱつつん女なのに、思い出してしまった僕は
どこか杏里の面影がある気がして、顔を凝視してしまう。

「髪伸ばしたからって、メイクしてるからって、背伸びたからって、
忘れてんじゃないわよ!」

強い口調のくせに、涙をためて僕を見上げる、生意気で、愛らしい
顔。

そうだ。

引越す前日、見送りにきた僕を、杏里は今のように見上げていた。まだ肩までしかなかった髪を、おかっぱくらいまで短くして、

「髪、のびたら逢いに行つてやるからな！」

と、強がりまくつて背中をむけた杏里。

「おまえ、約束覚えてたのか」

ごめん杏里、思い出したよ。

杏里はこんなに可愛くなつて、髪も綺麗に伸ばして、メイクも覚えたのに、僕は何も変われなかったよ。

「ごめん杏里、おかえり」

プリントを机に置き、僕は両手を広げる。

「馬鹿」

毒づきながらも、僕の胸にすぽつと収まる杏里は、最高に可愛い。

前言撤回、やっぱり吹奏楽部は、可愛い子の集まりなのかもしれない。

（後書き）

最初、コメディを書こうと思ってました
無理だったので、恋愛にしました（え
まあ、ラノベっぽい恋愛になってればいいな、と思います
読んでくれた皆さん、ありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8265n/>

とある吹奏楽部にて。

2010年10月8日22時46分発行